

## あとがき

本報告書は、本部町のカツオ漁業振興のために実態と問題点を浮彫りにし、振興方策のあり方等を検討する連絡会議に基づいて、特に焦点となったカツオ餌料魚に関する既存資料を蒐集したものである。漁業生産活動にあっては、経営面、労働力等、社会条件の解析も必要であるが、これは昭和53年度報告でとりまとめたい。カツオ餌料に関する調査研究は、沖縄県水産試験場創設の大正14年以来、集魚試験蓄養移植試験等が幾多の先達によって連綿と引続がれている。本報告では、戦前の水試事業報告に掲載されている研究報告については割愛した。従って既存資料とはいっても、1957年度以降の琉球水研、沖縄水試事業報告からの抜萃と琉球政府刊行物や海洋博シンポジウム資料等に水試研究員の投稿したものが中心となっている。さらにカツオ餌料魚の分類について、体系的に詳述されている森慶一郎氏の「カツオ竿釣用餌料についての検討」沖縄県におけるカツオ餌料魚の実態とその対策を明確に示している藤森三郎の「餌料魚増殖の緊要性と対策の要約」餌料イワシの生理生態面の角度から船内活間での活力試験結果について五十嵐正治氏の「強制循環方式による餌料イワシの保持」を引用させて載いた。紙面を借りて三氏に謝意を表したい。

カツオ餌料について整理してみると幾多の先達が先鞭をつけた資源生態、蓄養試験等は現時点でも重要であり、基本的な課題であることに先人の洞察の深さに敬意を表すると共に、この問題性の根が広く業界、水試、大学、行政等が結集して総力をあげ、この問題に取組む必要性があることを指摘したい。集積された知見から、主要種の分類はほぼ充分であろうと思われるが成長移動等資源生態的な分野はまだ充分とはいえない。本部地区のカツオ餌料魚は、沿岸リーフ域を棲息領域するイワシ類が主体であるが近年の山地開発、土木工事の結果、陸上の流入により、沿岸水帶の透明度や底質環境が変化し、近年は本部半島餌場において外洋性のキビナゴが減少し内湾性のミズン、水スルル、ドロクイ等が増加している。餌料魚の来遊、発生状況の変化は外部要因による生態系の変化の表われとみてよいであろうし、この問題については行政レベルで問題解決の方向を考えられよう。

漁具漁法についても、当水試では5名程度で操業可能な浮敷網を採用しているが業界が使用している餌取り用漁具については、資料の不備がみられ問題点の整理はついていない。本部地区では、敷網類の四双張網を使って餌料魚を採捕しているが、この漁法は、操業人員が12~15名の多人数を要することから、大巾な減員策が望まれる處であり、水試の浮敷網を含めより効率的漁具漁法の改善又は導入等について、再検討すべき時期に達している。この分野は、53年度において業界と水試の共同研究の課題といえよう。

蓄養及び活力の面では、関係者一同、関心の深いところであるが、過去の試験の実績は少いが水試としても今後は、研究項目にとりあげて事業を実施していく方針である。沖縄地元産魚種の耐蓄養性、活力試験に重点がおかれるのは言うまでもない。またカツオ餌料魚の安定供給が、目標であることから、常時餌料魚が大規模な蓄養施設に大量収容ができるような沖縄の海域に適した蓄養

技術の開発研究も含めている。従って、今後の課題であり、経営上の収支も考慮すべきであるが、大型運搬船により、九州方面から餌料魚を輸送し、蓄養基地を設定する構想も一考すべきと思われる。

最後に、本報告書がカツオ餌料について体系だった構成になっておらず、資料のラレツに終っていることを関係各位に深くお詫びしたい。しかしながら、これらの各小論には、「カツオ餌料の安定供給」という課題の核心に迫っていこうという趣意を含んでいることを御理解戴くと共に、御批判、御指摘を戴ければ幸いである。

組織的調査研究推進事業の実施にあたって、御多忙にもかかわらず積極的に御協力を下さいました  
+本部町漁業協同組合長 照屋正吉氏外関係者一同に厚く御礼申しあげる次第である。

本調査は財團法人海研中の企画案として着手され、設立初期より

主な一員となり、《参考小冊》を出版する事に意を用ひたが故に、(以下略)御批判御指摘、

御了り御見解を賜る所誠に感謝の意を表す。然れども、御指摘御教訓の御根拠、(以下略)御批判御指

御指摘御教訓の御根拠、御指摘御教訓の御根拠、(以下略)御指摘御教訓の御根拠、(以下略)

御指摘御教訓の御根拠、御指摘御教訓の御根拠、(以下略)御指摘御教訓の御根拠、(以下略)